

# 初期アウグスティヌスにおける真理について

岡崎 文明

## I. 序

アウグスティヌスの真理の探究は十九才の時、キケロの「ホルテンシウス」に接した時に始まる。<sup>(1)</sup> 著作における真理の探究は回心後の第一作 *Contra Academicos* より始まる。しかし積極的な探究の展開は第四番目の著作 *Soliloquia* (以降 *Sol.* と略す) より始まると考えられる。その後も真理探究は多くの試行錯誤を経る。そして漸く整理されて真理論が展開されたのは *Sol.* より四年後の *De vera religione* (以降 *DVR* と略す) においてである。拙論は実質的な出発点である *Sol.* において提出された探究の動機や未解決の問題が *DVR* における真理の探究でいかに展開され、解決が示されているかを見ながら初期に於けるアウグスティヌスが真理をいかに捉えたかを見るにある。

## II. *Soliloquia* における真理探究の諸問題

アウグスティヌスの真理探究の根底には至福への希求がある。ここから真理探究は二つの契機によって始められる。しかも二つは連関している。一つは「神と魂を知る」ことによって至福に達せんとするものである。神と魂を知る知り方は確実に絶対の認識でなくてはならない。そのために真理を知らなくてはならない。<sup>(2)</sup> なぜなら真理において絶対の認識が成立するからである。いま一つは「至福の知——神と魂の知識——を知る魂は不死である」ことを証明せんとするものである。もし不死でなければ魂は、たとえ至福の知を知ったとしても、真に至福にはなれないからである。魂の永生を証明する過程で真理が問われる。<sup>(3)</sup> このように真理への問は至福を求めていく途上避けることのできなかつた課題である。

*Sol.* は問題提起の書であると言われる。<sup>(4)</sup> この書で試みられた真理の探究が提出した主な問題を挙げよう。

(ここで veritas を「真理」、verum を「真」或いは「真のもの」と訳す。)

(1) 「真のものは真理によって在る、或いは、成る<sup>(5)</sup>」と語られる。「真理によって」は奪格 veritate で示されている。これはいかなる意味か。また「真のものの内には真理が存在している<sup>(6)</sup>」と言われている。「内に存在する esse in」はいかなる意味か。いずれも十分に明らかにされてはいない。

(2) 「真のもの」の定義が試みられる。まず「真のものとは見られている通りであるものである」とする。しかしこれには困難がある。つまりもしそうであるなら認識者が居ない所には真のものは何一つ存在しない事になってしまい、これは不都合である。これを避けるために「真のものは存在するものである」と定義し直す。しかしこれにも又困難が生じる。もしそうであるなら「真のもの」の否定である「偽のもの」は存在しないという事になってしまう。これは現実<sup>(7)</sup>に反する。こうして探究は行きづまる。

(3) 偽の探究が試みられるが、これは真のものの探究の困難を克服しようと意図されたものである。ここにおいて偽は表現上、正しく規定される。しかしそこには問題が残されていると思われる。偽の規定が次のようになされる。「偽とは見られる通りには存在していないものである」と。この規定を裏返せば先の真の定義「真のものは見られる通りに存在しているものである」になる。だがこれはアポリアに突き当たっていた。それ故偽のこの規定もそのアポリアを引き継ぐことになる<sup>(8)</sup>。そこで偽の別の規定が提出される。「偽とは実際には存在していないものが存在することを装うもの、或いは存在することを目指しているが実際には存在していないものである」と。アウグスティヌスは後者を正しい規定であると満足して受け入れている<sup>(9)</sup>。この規定も裏を返せば先の真のもう一つの定義「真のものは存在するものである」となる。ところが何故かアウグスティヌスはこの真の定義を正しいものとして受け入れて真のものの探究に決着をつけようとはしていない。何故であろうか。おそらく彼は、真のものの探究は偽の探究のように前者を否定し後者を受け入れる事ができるとは思えなかったのであろう。二つの「真のものの定義」は何か関係し合っている。だがその関係が何であるのか十分に掴むことができなかったに違いない。偽は真と互いに補い合って探究されねばならない。それ故真が明らかにされない限り偽の探究もたとえ表現上正しい規定に達しているとしても、それは未だ

十分に理解されていたとは言えないであろう。

### III. De vera religione における真理探究

この著作の後半に、救済に導く一つの道として理性による道が論じられている。この部分に極めて素朴ではあるが真理が全体的に把握されているのを見る。

「我々は理性が見えるものから見えないものへ、時間的なものから永遠なものへ上昇しながらどこまで進んで行くことができるのかを見ることにしよう<sup>(10)</sup>」と述べることから真理論は展開される。上昇する *conscendere* 方法は *DVR* の探究ばかりではなくて生涯の探究においても極めて重要な役割を果たしている。*DVR* においては上昇することによって真理論を導き出す。ここでは真理は三つの側面から見られている。第一は認識の側面から、第二は存在・創造の側面から、第三は倫理的側面からである。

#### 1. 認識の規範としての真理

はじめにアウグスティヌスは認識の規範としての真理を探究する。ここでは人間精神の認識の正しさの保証を求めて可感的なものから真理へ上昇してゆく。最初に探究の眼差しを物体に向ける。これは生命ある実体によって感覚される。生命のある物の方が無い物よりも優れている。「より優れている」とは真理により近いことである。よって優れているものに探究の眼差しを移す。この生命のある実体は感覚的生命と理性的生命とに分かたれる。前者は単に可感的なものを感じただけであるが後者はそれを判断し更に感覚自体を判断する。たとえば水中に差し込まれた真直ぐなオールが水面下で折れて見えるのを見て「オールは実際には折れていない」と判断し、更に「肉眼がそのように感覚する理由」を判断する。「感覚する」よりも「判断する」方がより優れている。よって理性的生命の方に眼差しを移す。理性的生命は可變的である。事物をよく判断したりしなかったりするからである。よく判断できるか否かは事物に精通しているか否かによる。精通するしないは「学芸 *ars*」<sup>(12)</sup> 或いは「学問」或いは「知恵」の分与の程度如何による。しかもそれらは不変である。よって理性的生命よりも学芸の方が一層真理に近い。そこで眼差しを学芸に移す。<sup>(13)</sup> 学芸の中には適合性があり、これによって学芸は学芸として美しく統括されている。そして人間精神はこの適合性に導かれて諸物体の中にある最高の同等性や類

似性を発見する<sup>(14)</sup>。この最高の同等性・類似性と言われているものがアイデアである。ここで筆者は「アイデア idea」という語を使用したが、これは DVRにおいて一度も用いられてはいない。又「理念 ratio」という言葉も用いられてはいない。しかしその代わりに lex という言葉が用いられている。この lex が何故人間精神が認識する時の規範であるアイデアになるのかを以下に見よう。

第一に同等性・類似性、このほかにも一性 unitas・調和 congruentia・同一性 parilitas 等々のアイデアも語られているがこれらは総称して lex と呼ばれている<sup>(15)</sup>。第二に lex は判断の基準の役割を果している。なぜなら等しい年も等しい月も不変の「同等性によって aequalitate」或いは「同等性という lex に従って secundum legem」判断される。又四角の広場も、四角の石も「四角の lex に従って」判断されると言われている<sup>(16)</sup>。第三に lex は肉眼ではなくて人間精神によって「見られる videre」, 「知性認識される intelligere」, 「洞察される conspicere」, 「認識される congoscere」と言われている<sup>(17)</sup>。第四に人間精神は「lex に従って」判断することはできるが「lex について」判断することはできないと語られている<sup>(18)</sup>。つまり lex は人間精神を超えた存在である<sup>(19)</sup>。第五に総ての学芸 ars は lex を持っている<sup>(20)</sup>。第六に lex は場所的広がりも時間的変化も持たないと言われている。つまり lex はこの世界内の存在者つまり被造物ではない。

以上から lex は人間精神が認識する時の基準となるアイデアであり、「規範」と訳され得る。

更にこの「規範」を「真理」<sup>(21)</sup>と呼び、人間精神は真理に従って secundum veritatem, 下位<sup>(22)</sup>のものを正しく判断すると言っている。よってこの真理は人間精神がなす判断の正しさを保証するものである。

この真理は判断が正しくあるために存在していなくてはならないものとして要請されたという事は次の上昇が端的に物語っている<sup>(23)</sup>。「アーチのある建物を見よ。何故等しい部分を反対側に作るのか。それは見る者を楽しませるからだ。どうして楽しませるのか。それが美しいからだ。では何故美しいのか。それは部分が互いに似ていて一性を持っているからだ。ではこの建物は完全な一性を持っているのか。いや完全な一性を模倣しているにすぎない。ではどこから『完全な一性を模倣している』と判断する事が可能なのか。既に完全な一性をどこかで見ているからではない

か」と彼は言う<sup>(24)</sup>。どこかで見ているからそれを規範にして判断が可能である。即ち正しい判断ができるならその限り一性という規範は存在していなくてはならない。

しかしこのように要請された真理は本当に存在しているのであろうか。この吟味を次のように展開する。このような真理が存在するのを疑う者は少なくとも「自分は疑っている」という事を知性認識 *intelligere* せよ。もしするならその者は「真」を知性認識している。なぜなら知性認識することができるものは「真」以外にはないのだから。ところで「真」は真理によって成り立つ。それ故真理の存在を疑うべきではない。こうして真理の存在を証明する<sup>(25)</sup>。以上が認識という側面から見た真理である。

## 2. 存在・創造の原理としての真理

またアウグスティヌスにおいて真理は存在・創造の原理として捉えられている。これはアウグスティヌスの創造論の萌芽である。アウグスティヌスは先に見た認識の規範である真理を存在論・創造論へ移してゆく。ここには認識論的な用語であった *lex* という語はもはや出現しなくなる。代わって *exemplum*, *forma*, *regula*, *unum*, *principium*, さらに *Verbum* という存在論的な創造論的な、用語が頻出する。

アウグスティヌスは先のようにして捉えた真理を神であるとなし、そして真理は「全能の製作者の技術 *ars omnipotentis artificis*」である<sup>(26)</sup> と言う。この一句は創造について簡潔に語っている。「全能の製作者は技術を用いて世界を製作する」と解せられるからである。しかもその「技術」は真理であるのだから、この一句は「全能の製作者即ち神は真理を用いて世界を創造する」の意味である。技術と言われる真理は世界を創造する手段或いは一種の原因と解せられる。この事は更にその後述べられている一文「御父は自ら判断する諸物を真理によって判断する<sup>(27)</sup>」から確かめられる。先に見たように理性的な魂が判断を下すのは *secundum veritatem* である。これに反し御父の判断は *per veritatem* (真理によって) である。この *per* は「手段」を示す。そしてこれは「原因」を示す *per* のより広い用法に包摂されている。ここで明らかになったことは御父は真理を「規範」としてではなくて「手段」として判断するということである。

それ故御父の判断は人間の判断と区別されなければならない。では「御父の判

断」とは何か。それは「創造」を意味すると解せられるであろう。御父は真理を手段として創造する。どうしてこう断言できるのか。それは果 effectus つまりこの世界に存在するものを見ればよい。ここに真理を用いてもを創造した跡を見出すことができる<sup>(28)</sup>と考える。その文に続けて「それが証拠には一性を欲求するすべてのものは真理を基準 regula 或いは形相 forma 或いは範型 exemplum…として持つからである」と述べている。一性を欲求するものとは一つのまとまりを持って存する個物を意味する。形相などと言われているのは真理である。よって「果である個物が真理を形相として持っている限り、御父は真理を用いてすべての個物を創造したと考えられる」とアウグスティヌスは語ろうとしている。このようにしてアウグスティヌスの創造論の骨組が出来上る。ここでは真理は創造論的に捉えられている。

この真理をもとの存在様態を考察する事から存在論的に確証しようとする。まず上昇の方法をとる。偽 falsum がこの世に見られるという事実から真理そのものへ上昇してゆく。偽とは存在しないものを存在すると考える所から生じる。だから偽でないもの即ち存在するものを示すのが真理である<sup>(29)</sup>。更に詳しく見る。物体は偽<sup>(30)</sup>の一性であるから、一 unum を完全に満たしてはいない。物体は完全に満たしていない所から欺く fallere、つまり偽が生じる。それ故この一を完全に満し、自らが一そのものである所のものが存在していなくてはならない。それは全く偽でないもの即ち欺くことのないものでなくてはならない。その一がまさに求められている真理<sup>(31)</sup>である。こうしてこの世に存在するものの存在様態から真理が要請される。よってまずこの真理は存在の側から即ち存在論的に捉えられた性格を持つということができよう。ところが、突然続けてこの真理はヨハネ伝に語られている御言であると語<sup>(32)</sup>る。即ち万物がそれによって作られた御言である<sup>(33)</sup>。どうしてこの真理は御言になるのであろうか。

次にアウグスティヌスは「真理」と「真のもの」との関係を考察する事から始めて先の存在論的な性格の真理から御言としての真理の動的な性格を顕わにしてゆく。

「真であるものは真理によって veritate 真である」とは「真理は真のものの形相で<sup>(34)</sup>ある」と語る。しかしこれだけでは、形相と言われたものがいかなるものであるのか十分には解されない。それを次に考察する。「真のもの」は「存在するもの」である。「存在するもの」は原理的な unum principale に「類似しているもの」で

ある。そして「類似しているもの」の形相は「類似性」である。よって「類似性」は「存在しているもの」の形相である。そして「類似性」は真理である<sup>(35)</sup>とつけ加える。ここから形相とは「存在しているものの形相」という意味であり、存在論的な意味で用いられている先述した真理の性格に一致する。ではこの形相は存在の次元でどのようにあるのか。否どのように働くのか。続いてアウグスティヌスはこの点を明らかにする。「御子は御父から ex であるが、他のものは彼（即ち御子）によって per ipsum <sup>(36)</sup> 在る。なぜなら原理的な一を完全に満たしている所のすべてのものの形相が先に在る。その結果一以外に存在しているものは一に類似している限りこの形相によって per eam formam <sup>(37)</sup> 成った」と語る。ここに形相は存在するものが成る時に関与するものであることが判明する。per は先に「手段」を表わし、更に「手段」は広い意味での「原因」の中に含まれると述べた。per formam <sup>(38)</sup> という表現から原因とは形相因を表わしていることが理解される。それ故形相とは創造の時に「手段」つまり「形相因」として働く真理である。では形相は更にどのように手段・形相因として働くのであろうか。ここではもうそれ以上のことは語られてはいない。

以上のようにアウグスティヌスは形相という存在論の用語を御言と結合して動的な創造論の意味の内に取り込み、先に提出した創造論の骨組に肉付をしたのである。

以上明らかにされた事柄をまとめてみよう。第一に真理は技術、形相、範型、御言、一、類似性などの言葉で表わされている。第二に真理は存在及び創造の次元で使われている。特に形相という一般には認識論、存在論の用語が創造論的な御言という特別な意味連関のもとに用いられている。第三に per veritatem iudicat, per formam fierent と言われているように、御父は御言なる真理を手段つまり形相因として創造した。この限りで真理は創造の原理である。第四に創造されたものは真理を痕跡として持っている。その結果それは「真のもの」であり「一つのもの」であり「存在するもの」である。

DVR では創造論が導入されたことによって真理は「認識」と「存在・創造」とに区別されて整理された。これが Sol. より発展した点である。ここから Sol. の諸問題の解決の鍵が与えられたと考えられる<sup>(39)</sup>。以下この立場から Sol. の問題を振り返ってみよう。

### 3. Soliloquia が残した問題の検討

第一の問題に関してはこう言えるであろう。Sol. では純潔な人が純潔によって castitate 純潔な人 castus であるように真のものは真理によって真 verum であると言われている。つまり純潔は形相であり純潔な人は形相を受けて成った個物であると解される。更に純潔な人が死んでも純潔は残ると言われている所から純潔は質料から離れては存在し得ない形相というのではなくて、プラトンのアイデアのように質料から独立に存在する形相であると考えられる。真理もそのような形相であると語られていると解せられる。よって真のものは真理という形相を分有して成立する。しかし純潔と真理は次の点で並行しない。真のものは存在するものすべてを指しているのに対して純潔な人はその一部である。よって真理は存在しているもの総てをおおうのに対して純潔は一部しかおわ<sup>(40)</sup>ない。

DVR では奪格 veritate の意味が明らかにされる。既に見たように DVR では、真理は真のものの形相であると語られていた。<sup>(41)</sup>この形相は創造の手段或いは形相因として働く。よって veritate という奪格は per formam の意味である。従って「真理によって真のものが存在する」とは verum per formam fieri. と解される。<sup>(42)</sup>ここからまた「真理は真のものの中に存在する」も理解される。つまり真のものはその内に分有された真理の形相を持って<sup>(43)</sup>いると。ところで純潔という形相は真理という形相と区別される。なぜなら真理が形相であると語られる時の形相は特別な意味、御言を指している。総てのものはそれによって創られたのであるから真理は存在する総てをおおう。それに反し「純潔」は御言の意味での形相ではない故、総てをおわ<sup>(44)</sup>ない。Sol. ではこのことに気付いていなかったと言えるであろう。

第二を見るために創造論を顧みてみよう。「御父は真理によって判断する」と述べられていた。判断する対象は総ての個物である。御父は判断する時総ての個物を見ていなくてはならない。そこで真のものはじめの定義の認識者を判断者と解することができる。判断する時御父は創造する。よって判断者は創造者、神である。そこからはじめの定義は「真のものは神によって見られているもの、つまり神によって創られたもの」となり、それは「存在するもの」である。こうして第二番目の定義と結び<sup>(44)</sup>つく。

第三に真のもののアポリアの解決を目指して、偽が整理されて論じられている。偽は三つの側面から捉えられる。第一は存在の側からである。偽は一を満たさない

限りにおいて一をまねている所から生じる<sup>(45)</sup>。一を満たしていない所は非存在である。即ち偽は存在しない所から生じる。第二に認識の側から見る。「偽は存在しないものを存在すると考える所から生じる<sup>(46)</sup>」と。この二つは *Sol.* で結論された事でもある。ではどうして判断者は存在しないものを存在すると誤まって判断するのか。第三に倫理的側面から見る。誤まった判断を下すのは真のものの根源である真理に眼を向けて真理に従って判断を下すのではなくて、感覚が報告するままにそれに従って判断をするからである。真理に従わぬ事は罪である。それ故真理をないがしろにする罪が偽の原因である<sup>(47)</sup>。

偽の考察を認識、存在の側にとどめずに倫理の側からなしたことは注目しなければならない。なぜなら真理は罪無き者が見るものであるという事を予想させ、真理が倫理的性格を有することを暗示しているからである。

#### 4. 至福の根源としての真理

第三にアウグスティヌスは真理を至福の根源として捉える。これはアウグスティヌスの一番根源的なモチーフ、至福への渴望から出ている。ここに立つ時、先の真理論はむしろ副産物と言い得るであろう。先の哲学的な真理とは違ってこの真理は愛の対象として生き方を示す所の倫理的な或いは人格的な或いはもっと端的に言うなら救済に導く所のものとして捉えられている。そう捉える根底にはアウグスティヌスの人間の創造論がある。先に見たように存在するものは総て「*per veritatem*」に存在する。しかしその中に「*ad veritatem*」に存在する者がある。それは理性的被造物・人間と知性的被造物・天使である。特に人間は神の似像と類似に向けて *ad imaginem et similitudinem* 造られた<sup>(48)</sup>。そこから第一に人間は不変の真理を見る事ができる<sup>(49)</sup>。第二に神に仕える時至福となる<sup>(50)</sup>。ここから人間は至福なる真理に向かうことが可能となり、また向かわなければならない存在として捉えられる。

これは *Sol.* の神の探究のモチーフを引き継いでいる。*Sol.* において神の探究を始める時、自分は神と魂を未だ知らないが愛していることだけは確実であると断言している<sup>(51)</sup>。そして神を知る知り方の探究にはいつてゆく。その中で幾何学の真理を知る知り方を神を知る知り方と比較して両者共知性認識の対象であるが幾何学を知ってもそれに対する喜びが生まれないが神を知れば神に対する愛が増し喜びが溢れると述べている<sup>(52)</sup>。幾何学は認識の規範である限りでの真理に導く。しかしそこには

愛と喜びを加えるものはない。だが至福の根源である真理に至ればそこに愛と喜びが満ち溢れる。アウグスティヌスが第一に求めていたのはまさにこの至福の根源としての真理なる神であった。

アウグスティヌスはこの真理を先と同じように上昇の道で示そうとする。「神の知恵は力強く極から極に達する」<sup>(53)</sup>という智書の言葉を根拠に真理はいかに存在の稀薄な悪徳の中にも何らかの影を宿している。それ故どんな悪徳に陥っている者であっても、わずかの真理に触れ、わずかであっても真理を楽しんでいる。それならわずかの真理よりも最高の真理を楽しむ方がよいではないか。だから最高の真理に向かつて進め、と励ます。そして有名な hortatio がはじまる。「外に行くな。汝自身に帰って行け。内的人間の内に真理は住む。そしてもし汝の本性が可変的であるのを見出しただら汝自身を越えてゆけ。しかし汝が越えゆく時に理性的推理をなす魂を越えてゆくのだということを覚えておけ。それでは理性の光そのものがそこから点火される所の源の方へ向かえ。理性的推理を善く働かせる者は総て一体真理以外の何処に到達するのか。真理は理性的推理をなすことによって自分自身に達するのでは決してなく、却って理性的推理をなす者が欲求するものであるのだから。そこにそれより優れた者があり得ない所の適合性を見よ。そして汝自身それと一致<sup>(55)</sup>せよ」と真理に上昇して達することを勧める。そして更に続けて「汝は適合性自体でないことを告白せよ。なぜなら適合性は自分自身を求めないが、内的人間が自ら自分の内に住む者と……最高の霊的な喜びにおいて一致するように、汝は……精神の愛によって探究して適合性に達したのであるのだから」と結んでいる。<sup>(56)</sup>

この上昇によって語られた適合性即ち真理の性格をまとめてみよう。第一に真理は内に帰ることによって求められねばならない。なぜなら真理は内的人間の内に住む者 inhabitator であるのだから。内的人間とは神の似像なる理性的な魂つまり精神である。内住者と言われている真理は理性によって発見される存在である。発見された時、内的人間を新たにすると<sup>(57)</sup>言われている。「新たにする」者は認識や存在の原理である限りでの真理ではなくて、人格的な存在者である内住者たる限りでの真理である。また内住者なる真理は内的に静かに語りかける不変の真理とも言われている。<sup>(58)</sup>ここにも人格的な存在者としての真理が示されているように思われる。第二にこの真理は理性を働かせる者が欲求する対象である。第三に理性は真理によって

光を供給されて真理に到達することができる。ここに認識の原理である真理のいま一つの性格を見い出すことができる。即ち認識の真理は認識の規範としてばかりでなく認識をなさしめる原理でもある。<sup>(59)</sup>そして真理の光がなければ真理に向かい到達することができない。それ故光の全く差し込まない陰府に落ちた魂には真理の想起は全くない。それ故全く至福ではない、ただただ絶望あるのみである。だから光のある間に闇に追いつかれぬように歩め歩めと勧め。<sup>(60)</sup>第四に真理を見るとは真理に一致すること *convenire* である。だが「真理との一致」は「真理との合一 *unio*」と異なる。それ故第五に自分は真理でないと告白する。もし「合一」であるなら「自分は真理と同質である」と思う。そこから「自分は真理である」とする生き方が出て来る。それは「傲慢 *superbia*」である。それに反し「一致」であるなら「自分は真理と異質である」ことを自覚する。そこからは「自分は真理ではない」と告白し、その者として生きる。これは「謙遜 *humilitas*」である。第六に精神はこの真理を愛 *affectus* によって求めてゆく。この真理は愛の対象としての人格性を持つ。そして一致した時、霊的な喜びが伴う。よってこの真理は愛と喜びの源として捉えられていた *Sol.* の神と一致する。

このように至福の根源としての真理を捉え、ここから倫理——具体的な生き方——を導き出す。即ち悪徳を考察してそれに陥らずに生きるように、倫理的な勧めをなす。そして最後に「我々は神を愛し、神を享受することによって至福に生きる<sup>(61)</sup>のである」と語り至福の真理たる神を讃えて巻を閉じている。

以上のように *DVR* においては *Sol.* の動機は引きつがれて展開され、真理の全体が素朴ではあるが整合的に捉えられていると言えよう。

真理には三つの側面があった。第一は *secundum veritatem* と表わされている認識の原理としての真理である。これは人間精神に光を与え、判断の規範として認識の正しさを保証する。第二は *per veritatem* と語られた存在・創造の原理としての真理である。存在するものは総て真理によって造られた。よって存在するものは総て真である。第三に *ad veritatem* と自覚された至福の根源としての真理である。神の似像として造られた人間精神は真理を愛し一致することによって至福となる。だが真理は三つあるわけではない。一つの真理が三つの性格 *ratio* を持っているのである。このように「真理」はアウグスティヌスの存在論、認識論、倫理学を根底に

おいて結びつけているとすることができるであろう。

### 註

- (1) *Confessiones* III, 4, 7 (2) *Sol.* I, 15, 27 (3) *ibid.* II, 1, 1  
 (4) 山田晶：アウグスティヌスにおける「真」と「真のもの」について「中世思想研究」XII  
 (5) *Sol.* I, 14, 27. *ibid.* II, 15, 28. *ibid.* II, 17, 31 (6) *ibid.* I, 14, 29  
 (7) *ibid.* II, 8, 15 この箇所は *verum* の探究の要約である。ここに至る前に次の順序で探究が展開されている。
- ① *ibid.* II, 5, 7. 「真のものとは見られるものとは異ったように存在していないものである」と語られるが、反論が提出される。誰の目にも見られないもの例えば地中深く存在している石は真のものではなくてしまい不合理であると。
- ② *ibid.* II, 5, 8. この不合理を回避するために「真のものとは認識しようと思ひ、かつ認識することができる者に見られる通りに在るものである」と定義し直される。しかし、これにも困難が伴う。誰にも見られないものは真ではないという事になってしまうからである。
- ③ *ibid.* II, 5, 8. 最後に「真のものとは存在するものである」と定義される。しかしこれにも反論が提出される。もしそうとすれば、偽は存在しないことになる。かくして *verum* の探究はアポリアに陥る。
- (8) *ibid.* II, 8, 15. ここにおける *falsum* の探究に先立って、若干の探究がある。それを要約すると次のとおりである。
- 「真のもの」の探究が行き詰った後、偽の探究にはいる。まず「偽とは真のものに類似したものである」と規定される。だが偽がもし真のものにすべての点で類似していて不類似が皆無であれば、その偽はもはや偽ではなく真となる。よって偽は真への類似ではない。では不類似としよう。すると「偽は真に似ていないもの」となる。しかしすべてのものは何らかの点で真なるものに対する不類似性を持つ。それ故すべてのものは偽となってしまう。これは容認し難い。このようにして偽の探究もアポリアに陥ってしまう。そこから改めて偽が規定し直される。それが本文の以下である。先行する若干の探究は *ibid.* II, 6, 10 ~ II, 8, 15
- (9) *ibid.* II, 9, 16 (10) *De vera religione* 29, 52 (11) *ibid.* 29, 52  
 (12) *ibid.* 29, 53 (13) *ibid.* 30, 54  
 (14) *ibid.* 30, 55 *Sed cum in omnibus artibus convenientia placeat, qua una salva*

et pulchra sunt omnia; ipsa vero convenientia aequalitatem unitatemque appetat, vel similitudine parium partium, vel gradatione disparium: quis est qui summam aequalitatem vel similitudinem in corporibus inueniat, audeatque dicere,.....以上の箇所を本文の通りに解釈した。

- (15) *ibid.* 30, 56...legem parilitatis, vel similitudinis, vel congruentiae...
- (16) *ibid.* 30, 56...secundum eadem legem...judicantur,...
- ...secundum totam quadraturae legem iudicetur...
- この他にも *secundum legem* という表現は多く見られる。
- (17) *ibid.* 30, 55...mente intellecta conspicitur...mente videretur?
- ibid.* 30, 56...illa aequalitas et unitas menti tantummodo cognita,
- ibid.* 32, 60 などこれらの表現は多く見られる。
- (18) *ibid.* 31, 57...praestare autem sibi eam naturam, secundum quam iudicat, et de qua iudicare nullo modo potest.
- (19) *ibid.* 30, 56 Haec autem lex omnium artium cum sit omnino incommutabilis,...*ibid.* 31, 57 Nam haec est illa incommutabilis veritas, quae lex omnium artium recte dicitur,...
- (20) *ibid.* 30, 56...nec loco tumida est, nec instabilis tempore.
- (21) *ibid.* 30, 56...legem, quae veritas dicitur.
- (22) *ibid.* 31, 58...secundum veritatem...judicamus;...
- (23) つまり物的世界に不完全に現われている分有アイデアを判断する時に、精神は完全なもの即ち判断の基準となるアイデアそのものを見ているのではなくてはならないとアイデアを要請する。この世界の不完全なものから、完全なアイデアへの上昇である。*ibid.* 30, 55 Unde enim qualiscumque in corporibus appeteretur aequalitas, aut unde convinceretur, longe plurimum differre a perfecta, nisi ea quae perfecta est, mente videretur?
- (24) *ibid.* 32, 59-60 (25) *ibid.* 39, 73 (26) *ibid.* 31, 57
- (27) *ibid.* 31, 58 et ideo quae Pater iudicat, per ipsam (=veritatem) iudicat.
- (28) *ibid.* 31, 58 Omnia enim quae appetunt unitatem, *hanc* habent regulam, vel formam, vel exemplum, vel si quo alio verbo dici se sinit; ここで *hanc* を veritas と解する。
- (29) *ibid.* 36, 66 (30) *ibid.* 34, 63 (31) *ibid.* 36, 66 (32) *ibid.*
- (33) *Secundum Ioannem* I, 1-3 (34) *De vera religione* 36, 66
- (35) *ibid.*
- (36) *ibid.* 43, 81 Itaque etiam Filius recte dicitur ex ipso, caetera per ipsum. ex ipso は文脈上直前の Pater を指す。しかし per ipsum は Filius を指してい

ると解釈する。

- (37) *ibid.* 43,81...per eam formam fierent. (38) 本文 III, 2. 58 頁 25. 26 行目
- (39) 「*Sol.* から *DVR* までの四年間に、アウグスティヌスは聖書の創造論を学んだ」とのこと、山田晶先生の御教示である(第23回中世哲学会大会における)。
- (40) この理解は「山田晶：アウグスティヌスにおける『真』と『真のもの』について」(前出)に負う。*Sol.* I. 15. 27
- (41) 註(34)を参照 (42) 註(37)を参照 (43) 註(28)を参照
- (44) 山田晶：存在と真理「中世思想研究」Ⅷ より多くを学ぶ。
- (45) *De vera religione* 36, 66 (46) *ibid.* (47) *ibid.* 36, 67
- (48) *ibid.* 44, 82 (49) *ibid.* (50) *ibid.*
- (51) *Sol.* I, 1. 5 Jam te solum amo,... *ibid.* I, 2, 7 A...nunc autem nihil aliud amo quam Deum et animam, quorum neutrum scio.
- (52) *ibid.* I, 5, 11 A...Deinde si Dei et istarum rerum scientia par esset, tantum gauderem quod ista novi, quantum me Deo cognito gavisurum esse praesumo. *ibid.* I, 7, 14 R...Caritati vero non solum nihil detrahetur, sed addetur etiam plurimum.
- (53) *De vera religione* 39, 72, *Sapientia* 8, 1
- (54) *De vera religione* 39, 72 ここで prima pulchritudo, summa convenientia, veritas と言われているものはすべて同義である。
- (55) *ibid.* (56) *ibid.*
- (57) *ibid.* 39, 73 Omnis ergo qui utrum sit veritas dubitat, in se ipso habet verum unde non dubitet; nec ullum verum nisi veritate verum est...ubi videntur haec, ibi est lumen sine spatio locorum et temporum et sine ullo spatiorum talium phantasmate....Ergo antequam inveniantur in se manent, et cum inveniuntur nos innovant.
- (58) *ibid.* 55, 110 (59) *ibid.* 34, 64
- (60) *ibid.* 52, 101 (61) *ibid.* 55, 113...beate vivimus